『ナルチスとゴルトムント』における受け取ることと与えること

服　部　麟太郎

はじめに

『ナルチスとゴルトムント』（Narziß und Goldmund, 1930）[1] は全二十章から成る、ヘルマン・ヘッセ（Hermann Hesse, 1872-1962）の長編小説のひとつである。物語は中世のマリアブロンという場所にある修道院に、少年ゴルトムントがやってくるところから始まる。ゴルトムントはそこで出会った年上の見習い僧であるナルチスに憧れ、彼と同じように僧になること、精神的なものに奉仕することを目指そうとする。しかしゴルトムントの本来の性質は、むしろナルチスとは正反対の、愛の人間、芸術家のそれであった。その性質に気づいたナルチスの導きや、女性との出会いを経て、ゴルトムントは自らの運命を知り、修道院を抜け出して放浪を始める。数多くの女性との愛欲、芸術家ニクラウスとの出会いと決別、そしてペストの流行――平坦ではない旅の道中で、快楽や、芸術や、死に触れたゴルトムントは、自らの感性を磨きながら歩みを進める。だがある時、伯爵の妾アグネスとの逢瀬が伯爵に見つかったゴルトムントは、処刑の危機に陥ってしまう。そんな彼を救ってくれたのは、修道院長となり、伯爵の城を訪れていたナルチスだった。彼と共に修道院に戻り、客人として迎えられたゴルトムントは、芸術家として彫刻の創作に打ち込むようになる。しかし創作を続けるにつれ、その源泉となる放浪の体験が涸れかけていることに気づいた彼は、再び旅に出ることを決める。成長したゴルトムントとの再会によって、自省を余儀なくされていたナルチスは、その友が再びいなくなったことでその想いを募らせる。しかし、ようやく旅から帰ってきたゴルトムントは病気で死にかけてい

た。ナルチスは彼にキスをし、愛していることを打ち明けるが、ゴルトムントはそれを受け入れたのち、亡くなってしまう。

ヘッセはこの作品の原稿を、1927年4月からの約二年間で仕上げた。その後本作は、1929年10月から1930年4月までの間、文芸雑誌『ノイエ・ルントシャウ』（Neue Rundschau）にて、「ある友情の物語」（Geschichte einer Freundschaft）という副題とともに、7回にわたって連載され、同年の7月には単行本版も出版された。ヘッセの生前において、彼の著作の中で最も広く普及した作品であった。[2)]

雑誌での連載当時、副題についていた「友情」とは、やはりナルチスとゴルトムント二人の友情を指しているのだろう。しかしいざ読んでみると、作品の中盤、物語の半分はゴルトムントの旅について描かれており、伯爵の城で再会するまで、ナルチスが直接登場することはない。そうしたことから、山口勝は「作者の目は芸術家ゴルトムントの方により多く注がれ」[3)]ていると指摘する他、ヤコブ・スヴァンベリ（Jakob Svanberg）もこの作品がゴルトムントを中心に展開しているとしたうえで[4)]、ゴルトムントの成長に、ナルチスを含む他の登場人物がどう影響するかを論じている。このように、『ナルチスとゴルトムント』の研究では、ナルチスよりもゴルトムントの方に着目して論じられることが多い。スヴァンベリは、論文のタイトルでも文中でも、ゴルトムントがこの小説の主人公であると明言してすらいる。[5)]

このような従来の研究については後に詳しく論じるとして、とにかく『ナルチスとゴルトムント』は、二人の友情物語という側面を持つと同時に、ゴルトムントの物語という側面も持っている、という点に注目したい。本稿では、この二つの側面の両方に同時に目を向けながら、『ナルチスとゴルトムント』について考察することとする。つまり、ナルチスとゴルトムントの関係性の変化を通して、ゴルトムントの成長を分析すること、これを本稿の方針と定める。目的は二つある。一つ目は、『ナルチスとゴルトムント』において成長が何を意味するのかを、関係性の変化という新しい視点によって、

再検討することである。そして二つ目は、この作品で、ヘッセが相対する二極の葛藤をどのような方法で乗り越えようとしたのか、明らかにすることである。『ナルチスとゴルトムント』の高橋健二訳の邦題が『知と愛』[6] であることにも示唆されるように、本作では精神と感性という人間の内面の対極的な性質が、ナルチスとゴルトムントという異なる二人の人格にそれぞれ分け与えられている、ということは繰り返し指摘されてきた。作中でも、ナルチスはゴルトムントに自分と彼との違いについて、このように語っている。

> 「君たちは満ち足りた中に生きていて、愛の力と、体験することのできる力とが与えられている。僕たち精神の人々は、君たち他の人々をしばしば導き、支配しているように見えるが、満ち足りたものの中ではなく、乾きの中に生きている。生命の充実、果実の汁、愛の庭、芸術の美しい国が君たちのものである。君たちの故郷は大地であり、僕たちの故郷は観念である。君たちの脅威は感覚の世界に溺れ死ぬことであり、僕たちの脅威は真空の空間で窒息死することである。君は芸術家であり、僕は思索家だ。君は母の胸で眠り、僕は砂漠の中で目覚めている。僕には太陽が輝き、君には月と星々が輝く。君は少女の夢を見て、僕は少年の夢を見る…。」（51）

このような二人の関係性の変化を論じることは、ヘッセが二極の葛藤をどう乗り越えようとしていたか、考察するための足がかりとなるだろう。

さて、具体的には、本稿では二人の関係性について、両者の「受け取ることと与えること」に着目して、分析を進めていく。なぜなら、この「受け取ることと与えること」とは、作中でも繰り返し登場する重要な表現であり、二極を乗り越えるというテーマにも、深く関わっているように思われるためである。またこの表現は、ゴルトムントが放浪する時期、更に言えば、女性たちと関わる際に繰り返し登場する。そこで本稿では、女性たちとゴルトム

ントの関係性についても目を向けることになるだろう。

また、二人の関係性を論じる中で忘れてはいけないのは、ナルチスの成長、という要素である。ゴルトムントの成長を導くナルチスも、またこの関係性の中で成長している。特に物語終盤は、ナルチスの自省や苦悩、そしてそれによる変化が主に描かれることとなる。彼の成長がなければ、二人が最後に辿り着く関係性は、もっと別のものになっていただろう。それを踏まえれば、先ほどは本稿の方針を「ゴルトムントの成長」の分析と表したが、これでは不十分である。改めて正確に言うならば、本稿の方針は、ナルチスとゴルトムントの関係性の変化を通して、二人の成長の内実を明らかにすることである。

1．先行研究の整理

まずは本稿の論点であるところの「ナルチスとゴルトムントの関係性」、「成長」という二つのテーマが、これまでの研究において、どのように理解されてきたのかを概観していく。それを通して、これまでの研究において議論の分かれてきた点を確認し、関係性と成長とを結びつけるという方針を採ることとした経緯についても整理しておきたい。また、女性たちとゴルトムントについても、後の分析で用いるからには、簡潔にまとめておくこととしよう。

1.1．ナルチスとゴルトムントの関係性

先述のように、作品の中盤、ナルチスはほとんど登場しない。彼とゴルトムントが直接関わるのは、ゴルトムントが修道院に最初にやってきてから放浪に出る前までの期間（第一章から第六章中盤まで）と、伯爵の城で再会してから物語の結末に至るまでの期間（第十七章から第二十章まで）のみである（便宜上、以後それぞれの期間を「放浪前」「放浪後」と表現する）。この放浪前と放浪後とで、二人の関係性は大きく変化する。

この二つの期間の友情を明確に分けて論じているのが、長尾伸である。長尾は、放浪前の二人の関係性について、「教える者と教えられる者との間の友情」[7] と表現している。ナルチスはその優れた天分のために、見習い僧ながら既に教鞭を取っているから、彼らは教師と生徒という間柄においても、教え、教えられる関係性である。だが長尾がここで用いている「教える」という語はむしろ、ナルチスがゴルトムントを彼本来の運命へと導く、という意味合いの方が強いだろう。スヴァンベリが言うことには、「ナルチスが物語およびゴルトムントの人生にとって意味している、恐らくもっとも重要な役割は、彼がゴルトムントに母を思い出させることで、ゴルトムントが自らの本性へと戻る手助けをする点である。」[8] この役割は、誰よりもナルチス自身が、強く自覚するものであった。

放浪前の二人がこのような上下関係を築いているのに比べて、放浪後の関係性は、長尾に言わせれば「一個の男と男との間の、対等の立場に立つ人と人との間の友情である」[9]。二人の対等性に関しては、作中でもゴルトムントが明確に独白している。

> しかしナルチスに対して、彼は今や自分にふさわしい関係性を見出していた。もはや従属の関係ではなく、自由で相互的な関係だった。彼はナルチスの優れた精神のもと、屈辱を感じることなく、客人でいることができた。相手が彼の中に対等なもの、創作家を見出してくれたからだった。(279)

そして、この対等になった二人の関係性は、基本的に、お互いが自身の「失われた半分」を相手によって補完し合うための関係性として解釈されてきた。例えばスヴァンベリは、ゴルトムントがナルチスに導かれるのみならず、ナルチス自身も、ゴルトムントの死という劇的な状況に大きく影響を受けたと述べ[10]、二人の関係を、「互いに豊かにし合う関係」[11] と捉えている。

また、ヘレン・クリスティーン・クラフォード（Helen Christine Crafford）は、ナルチスはゴルトムントを通じて愛を知ることができた、という側面を取り上げ、彼らが自らの欠けた性質を相手に見出していると主張する。[12] このような相補性の持つ意義として、リヒャルト・ブラジウス・マツィヒ（Richard Blasius Matzig）は、二人の愛と友情とが、彼らの象徴する二極を和解させると主張する。[13] この調和を描くことによってヘッセは、内面におけるこの二極の分裂の苦しみから、解放されたのだという。[14]

このような、ナルチスとゴルトムントの間に相補的な関係性と、精神と感性の二極の和解とを読み取る傾向は、これまでの『ナルチスとゴルトムント』研究に通底するものであるといっていい。しかしその中でも、研究者の中で意見の分かれる点が主に二つ存在する。一つ目は、ナルチスとゴルトムントが本当に対等になったのか、という点である。例えばこの問いへの反対意見として、山口は、二人の関係性は確かに本来対等となるはずなのだが、実際は「当初のナルチスのゴルトムントへの優位は、終結部に至って逆転し、ナルチスは劣勢に追いこまれる」[15] と述べている。また橋本裕明は、ゴルトムントが今際の際にナルチスに遺す言葉、「〈母がいなければ、愛することはできない。母がいなければ、死ぬことはできない。〉」（322）という科白について、精神の次元のみに生きるナルチスに対する、精神や官能という次元を超越した究極的な立場にいるゴルトムントからの言葉であると解釈しており、[16] そこには上下関係が見て取れると言っていいだろう。また二点目は、二人の関係性を通して、二極は統合されたと考えるかどうか、である。確かに、相補的な関係性を通して、二極は和解する、と解釈する点については多くの研究で共通している。しかし、マツィヒのように、内部の分裂は止揚された[17] と捉える研究もあれば、クラフォードのように、統合しないながらも、極性は認められ、問題や矛盾としてではなく、均衡させるべき課題として現れるとする研究もある。[18] 関係性に関するこれら二つの問いについて、本稿でも成長という変数を加えて分析することによって、それぞ

れにひとつの結論を出すことを目指したい。

1.2. 成長

次に、成長というテーマに着目して『ナルチスとゴルトムント』を論じた研究をいくつか見ていこう。高橋陽一に言わせれば、この作品は、「主人公であるゴルトムントの魂の発展過程、つまり〈デーミアン〉以後のヘッセ文学の基本テーマである、自己実現の過程を描くものである。」[19] そしてその過程においてゴルトムントが出会う他の登場人物たちは、しばしば彼の成長に何かしらの影響を与える役割を持った人物として解釈される。例えば松田幸子は、「ゴルトムントはさまざまな母の像を放浪の旅の途中で出会う女性の中に発見する」[20] としたうえで、その女性たちが出会いを通じてゴルトムントに何を示すのか、という観点によって、女性たちを三種類に分けて分析している。[21] またスヴァンベリは、ゴルトムントは自分の人生の進行について自ら決断することはほとんどなく、他者からの影響を強く受ける人物であり、その影響によって彼は発展し、物語も進行すると主張する。[22] そしてその一方でナルチスは、ほとんど他者から影響を受けない、静的な人物であると対置される。[23] しかし改めて確認しておきたいのは、1.1. で見た通り、スヴァンベリは相補性の議論において、ナルチスもまたゴルトムントに影響を与えられたと言及していることだ。ここにスヴァンベリに限らず、これまでの『ナルチスとゴルトムント』論の一つの傾向を見出すことができる。それはつまり、二極や相補性の議論においては、ナルチスの変化が扱われているのにも関わらず、成長の議論となると、ゴルトムントの変化ばかりが取り上げられ、ナルチスの変化は捨象されてしまうようになる、ということである。例えば、クラフォードは『デーミアン』（Demian, 1919）、『荒野のおおかみ』（Der Steppenwolf, 1927）、『ナルチスとゴルトムント』というヘッセの三作品において、主人公の発展と二極というテーマとの連関を論じている。彼女もまた、ナルチスとゴルトムントの相補性に着目していたこと

は、1.1. で確認した通りである。しかし、彼女はこの三作品を通して主人公の発展の意味を考察する際、「〈教養小説〉というジャンルに従って、主人公ジンクレール、ハリー、そしてゴルトムントはアイデンティティ探求の段階を経由し、その際に世界の極的な解釈様式と取り組む。（中略）その結果として明らかになるのは、極性（ひいては矛盾の経験）が主人公たちの発展にとって一つの前提条件であるということである。」[24] と語っており、やはりそこにナルチスは含まれていない。このように、ナルチスの変化に触れる研究も決して少なくないが、その指摘はゴルトムントと互いに変化し合う、という相補性の議論に収斂されてしまい、ナルチスの「成長」や「発展」そのものの性質や意味の議論には繋がらずにいる。しかしクラフォード自身も主張するように、二人の相補性と成長というテーマが連関しているのであれば、ナルチスの成長にも目を向けることは必要不可欠であるはずだ。[25] そこで本稿はナルチスとゴルトムントの二人に等しく目を向けながら、この二つのテーマを結びつけることを分析の方針とし、『ナルチスとゴルトムント』研究における成長に関する議論に、新たな視座を投げかけることを目指す。

1.3. 女性たちとゴルトムントの関係性

最後に、『ナルチスとゴルトムント』における女性たちに関する見解にも、少しだけ目を向けることとしよう。1.2. でも述べたように、本作における登場人物は、ゴルトムントを自己実現へと導くために、彼に何かしらの影響を与える人物として物語中に配置されている、と捉えられることが多い。女性たちもそれは同様であり、それは先ほど松田の論にて確認した通りである。さてここで、その松田の引用でも言及があった、「母」について少し触れておきたい。ゴルトムントが生涯をかけて目指す「母」とは、単にゴルトムント自身の母親を指す言葉にはとどまらず、物語が進むにつれて、聖母マリアや人類の母イヴなど、様々な意味を持つものへ変容していく。この「母」は、生や愛、快楽、官能、本能、そして死や苦痛などといった、感性的なも

のを司るものとして描写される。

> 母の中には、あらゆる優美なものがあっただけではなく、すなわち甘美で青い愛のまなざしや、幸福を予言するしとやかな微笑みや、愛撫する慰めがあっただけではなかった。彼女の中、どこか優美な覆いの下には、あらゆる恐ろしいものや暗いもの、あらゆる渇望や、あらゆる不安、あらゆる罪、あらゆる悲惨、あらゆる誕生、あらゆる死の必然性までもがあった。(65)

ゴルトムントは自身とナルチスとの違い、すなわち「母的出自と父的出自との間の違い」(69) を理解したことで、「母」を目指した放浪の旅を始めるのである。「母」を目指すとは、ゴルトムントにとって自らの本質を突き詰めることであり、つまりそれはナルチスに言わせれば、「〈自己を実現する〉」(287) 試みである。[26] これを踏まえれば、ゴルトムントが放浪する中で出会う女性たちは、彼を自己実現へ、すなわち、「母」のもとへ、感性の道へと導く存在であるといえる。確かにゴルトムントの成長、自己実現が本作の主題の一つとなっている以上、その契機としての役割が女性達に与えられていることは否定できない。本稿でも、女性たちとゴルトムントとの関係を論じる際には、ある程度はこの側面を前提とすることとなるだろう。しかし、本稿ではそれだけでなく、彼女たち自身の描写や、ゴルトムントとの身体的なやりとりに対する描写に細かく注目することで、これまでの研究において見逃されてきた表象、すなわち、「受け取ることと与えること」という表象について論じることとしたい。

2.「受け取ることと与えること」

さて、前章をまとめれば、1.1. では先行研究を踏まえて、二つの問いを掲げた。すなわち、「ナルチスとゴルトムントは対等になったのか」、「二人の

関係性を通して、二極は統合したのか」という二つである。ここからは、1.2. で導き出された課題でもあったように、成長と関係性とを結びつけて分析することによって、それらの問いに答えていくこととする。そのために、まずは 1.3. でも言及したように、ゴルトムントの放浪する時代に目を向け、彼と女性たちとの関わりの中に見出せる、「受け取ることと与えること」の表象を見ていこう。

2.1. 女性たちとゴルトムント

この「受け入れることと与えること」（Nehmen und Geben）という表現は、作中で繰り返し登場する。そしてそれは基本的に、ゴルトムントが修道院を離れ、放浪する時代において見出すことができる。これは、彼が放浪に出る決意をナルチスに告げる場面において、既に示唆されている。

> 「ある女性のものになること、身を任せることは、なんて美しいことだろう！僕が言うことがばかげたように聞こえても、僕を嘲笑わないでくれ。でもほら、ある女性を愛し、彼女に身を任せること、彼女を完全に包み込んで、彼女に包み込まれていると感じることは、君が〈恋をすること〉と呼んで少しばかにしているようなことではない。それはばかにされるべきものではない。それは僕にとって、人生への道、人生の意味への道なんだ。」（85）

ここではまだ「受け取ることと与えること」という表現は直接用いられてはいない。しかし女性を包み込む（einhüllen）ことと包み込まれる（eingehüllt）ことという、対照的な行為が並列されている。どちらか一方のみでも文章としては成り立ちそうであるにも関わらず、である。この時ゴルトムントの内には、ある価値観の萌芽が読み取れる。それはつまり、「受け取ることと与えること」という能動と受動の行為を、同時に行うことを重要視する価値観

である。実際に「受け取ることと与えること」という表現が用いられる箇所として、老騎士の屋敷の令嬢リディアに、ゴルトムントが初めてキスをする場面を見てみることとする。

> 彼は彼女の口をそっとかすめた。その口は彼に、ひとつの小さな子どものキスで返したが、彼がもう解放してくれなくなると、痛く驚いたかのように開かれた。彼は優しく求めるように、彼女の戻って逃げようとする口を追いかけた。その口がためらいながらも、再び向かってくるまで。そして彼はその魅了された人に、力づくではないように、キスの受け取り方と与え方とを教えた。彼女が疲れはてて顔を彼の肩に押しつけるようになるまで。(119)

最後には、「キスの受け取り方と与え方」(das Nehmen und Geben des Kusses) というかたちで、やはり先ほどの「受け取ることと与えること」が登場している。ただ、さらに注目したいのは、この時ゴルトムントはリディアからも向かってくるまで、強引にキスすることもなく、優しく彼女の唇を追い続けているということである。この行動にも、自ら追いかけながらも、相手からも向かってくることを望む、すなわち能動と受動の並列を望むゴルトムントの価値観が読み取れるように思われる。次に引用する場面では、彫刻家であるニクラウス親方が創作をする際の手を見て、ゴルトムントが感じたことが吐露されている。

> この両手は、しっかりとした、それでいて感覚の鋭い指で粘土をつかみ、形を作った。その手は、愛する男の手が、身を任せる愛人に触れるように、粘土を扱った。恋をしていて、かすかに揺れ動く感情に溢れ、貪欲ではあるが、受け取ることと与えることの区別をせず、みだらでありながら同時に敬虔であり、遥か昔の深い経験からくるかのように、確

かで卓越していた。(159)

更に続けて引用するのは、ゴルトムントが作中で出会った中で最も美しいと評する伯爵の妾アグネスが、初めてゴルトムントの前に現れた場面である。

> それは馬に乗った女性だった。好奇心が強く、いくらか冷たい青い目をしていて、しっかりとして、引き締まった手足を持ち、享楽や権力への欲求と、自尊心や敏感な官能的好奇心とに満ちた、生気の溢れる顔をした、背の高い明るい金髪の女だった。茶色の馬の上で、いくらか尊大で高慢な姿勢をしていて、命令することには慣れているようだが、心を閉ざしていたり、拒絶的だったりするわけではなく、いくらか冷たい目の下で、活発な鼻の孔は世界のあらゆる香りに開かれていて、大きくて緩んだ口は受け取ることも与えることも最高度にできるようだった。(245)

確かに、富や名声のためにも仕事をするという世俗的な点について、ゴルトムントはニクラウス親方を尊敬していなかった。だが、ニクラウス親方の作った聖母マリア像を見たことで、ゴルトムントは芸術に目覚め、ニクラウス親方のもとで修業をするようになったのだから、彼の手が、その手が作り出す像が、ゴルトムントにとって非常に価値のあるものであったことは確かである。また、アグネスも、ゴルトムントが自身と同類だと思うほど、「官能と魂に富んでいて」(245)、「情熱に精通してい」(245) る人物として描かれている。それをふまえると、「受け取ることと与えることの区別をせず」(ohne zwischen Nehmen und Geben zu unterscheiden) や、「受け取ることも与えることも最高度にできるようだった」(schien des Nehmens und Gebens im höchsten Grade fähig) という表現が、愛や芸術において非常に優れた存在であるニクラウス親方やアグネスを称える表現として用いられて

いるということがわかる。やはり、「受け取ることと与えること」の並存には、大きな価値があるのだろう。

ここで当然浮かぶ疑問は、ゴルトムントと女性との関係性はどうだったのだろう、ということである。何かを受け取り、与えていたのだろうか。彼と、彼が出会う女性たち一人ひとりとの関係性について分析をしていきたいところではあるが、紙幅の都合上それは困難である。そのため、本稿においては最も抽象的に「女性」とゴルトムントとの関係性が描写された箇所として、第八章の冒頭に目を向けたい。そこでは、ゴルトムントが長い放浪の中で女性から女性へと渡り歩く様子が描かれる。彼は、さすらう中で出会う女性たちに何度も熱望され、愛の一夜を共にする。しかし、彼女たちの多くは夫を持っていて、夜が明ければ夫のもとへと帰っていく。誰も決して彼の放浪についていこうとはしない。どの女性の愛も、またゴルトムント自身の愛も、長続きはしなかった。しかし、その遍歴の中で、彼はずっと女性達から学んでいた。

> どんな女性も彼に何かを残した。身振りや、キスのやり方や、特別な遊びや、自分を捧げたり、自分を守ったりする特別な方法を。ゴルトムントはあらゆるものに応じた。彼は飽くことを知らず、子どものように柔軟で、あらゆる誘惑に開かれていた。それによってこそ、彼自身もそれだけ誘惑的になったのだ。（中略）しかし彼は学んだ。彼はただ短い期間にたくさんの愛し方や愛の技術を学び、たくさんの愛人から経験を自身の内に受け入れただけではない。彼は女性達を、その多様性の内に見て、感じ、手で探り、においをかぐことも学んだ。（106）

この場面から、女性たちがゴルトムントから受け取ったものを読み取るとすれば、それはやはり性的快楽であるように思われる。高橋が、ゴルトムントは女性たちにとって「単なる性的欲望の対象でしかあり得ない」[27] と主

張するように、女性たちの一時的な要求や欲望に応えることこそが、彼が彼女たちに与えたものではないだろうか。

もちろん、それは彼にとっても同じである。彼の愛もまた移ろいやすく、その一時的快楽を求めて、彼は女性から女性へと渡り歩くわけだが、ただ彼は「多くの愛人から経験を摂取したばかり」ではない。先の引用で見た通り、彼は官能を体験するだけでは終わらず、そこから愛について学び、感性を研ぎ澄ませている。それは山口も、ゴルトムントが女性たちとの体験を通して「感性的なものの把握力を先鋭化し」[28] ていると主張する通りである。つまりは、ここで彼が性的快楽に加えて女性たちから受け取っているものは、愛や感性に対する「学び」であり、これは少なくとも作中で描写されている限りでは、女性たちはゴルトムントから受け取ってはいないものである。

ここまでを踏まえると、女性たちとゴルトムントは、確かに何かを受け取り、与えるという関係性を築いているということがわかる。しかしその受け取り、与えるものの内容には、偏りがある。ゴルトムントは快楽だけでなく「学び」も受け取る分、女性たちと比べて、この関係性からより多くのものを得ているということができる。ただこのことは必ずしも、女性たちよりもゴルトムントの方が優位にあるということを意味するわけではない。例えば逆に、女性たちの方がゴルトムントに、導き手としてより大きな影響を与えている、と捉えることもできる。この偏りにどのような意味があるのか。その結論を出すには、まだ分析が足りていないといえるだろう。この偏りや、関係性そのものの意味については、ナルチスとゴルトムントとの関係性も分析した上で、改めて考察することとしよう。

2.2. 放浪前のナルチスとゴルトムント

まずは、放浪前のナルチスとゴルトムントの関係性について改めて見ていこう。

ナルチスとゴルトムントの間で始まったのは、奇妙な友情だった。この友情を気に入ったのはわずかな人達だけであった。そして時には、彼ら二人自身も友情が気に入らないことがあるように見えた。

思索家であるナルチスは、その友情について、まず初めに最も苦しんだ。彼にとってすべては、愛さえもが、精神であった。考えもせず、引力に身をゆだねることは、彼には備わっていなかった。彼はこの友情において、導く精神であり、長い間彼一人だけが、この友情の運命と、大きさと、意味とを自覚し、認識している人物だった。長い間、彼は愛の真ん中で孤独であり続けた。理解していたのだ。彼は友をその認識に導いて初めて、本当に自分のものにすることができるということを。ゴルトムントは、心から、燃え上がるように、遊ぶように、釈明もなしに、新しい愛に身を捧げた。ナルチスは自覚し、責任をもって、高い運命を受け入れた。(34)

これは第三章の冒頭、二人の間に始まった友情について語られる場面である。1.1. でも確認した通り、この友情ではナルチスが「導く精神」であり、ゴルトムントはそれに導かれていくという上下関係が築かれるわけだが、ここで注目したいのは、引用部分の一文目、この二人の関係性が「奇妙な友情」(Eine wunderliche Freundschaft) であると表現されていることである。これは一体どういうことだろうか。随分と唐突に登場したように思われるこの表現だが、しかしその意味について言及している研究は、管見の限り見受けられない。そこで本章ではこの「奇妙」という言葉の意味について、「受け取ることと与えること」の観点から考えていきたい。

それでは先ほどと同様に、この二人の関係性における、互いの受け取るものと与えるものについて整理していこう。まずゴルトムントがナルチスに与えるものといえば、愛である。もう少し詳しく言えば、それは無心で、献身的で、情熱的で、官能的な愛である。[29] そもそもこの友情は、ゴルトムン

トが村へ行ったことで少女と出会い、女性や愛というものに触れてしまったがために動揺しているところを、ナルチスに面倒を見てもらったことで始まったものである。そのため、まだ自分の天分に気づかず、僧の生活をするために禁欲的であるべしと考えていたゴルトムントにとって、ナルチスとの友情は、女性との愛という危険から逃れるための、ある意味代わりとなるものであった。

> そして今、運命が彼に救いを差し出した。今、最も差し迫った窮地において、この友情が彼のもとへとやってきて、彼の欲求には花の咲き誇る庭を、彼の畏敬の念には新しい祭壇を与えた。ここでは、彼は愛することが許され、罪を犯すことなく身を捧げること、自分より年長で賢く、賛美すべき友に心を贈ること、官能の危険な炎を、高貴な供え物の火に変え、精神化することが許された。(34f)

ゴルトムントがナルチスに与える愛は、このように無心に身を捧げるようなものであると同時に、やはり彼自身の性質のためか、官能的な側面も持ち合わせている。第六章にて、ゴルトムントは放浪に出る直前、修行中のナルチスに対して別れを告げに行く。その中で、彼がナルチスを抱きしめる場面がある。そこには、「彼は友が愛撫をはばかることを知っていたため、キスはせず、ただ友の両手を撫でた。」(85) とある。これは裏返せば、自らは愛撫を、キスをしようとしていたということである。この頃にはゴルトムントはリーゼと出会い、自分の「人生への道」にも気づいているため、自分の求めるものにも自覚的だったのだろう。

一方、ナルチスはというと、先の引用の場面においてゴルトムントも理解している通り、このような官能的な愛を、ゴルトムントに与えはしない。ただ、それは決してナルチスがゴルトムントを愛していなかった、というわけではない。むしろ彼は、精神の人間、禁欲者であるために、そのような愛を

ゴルトムントに向けないように強く自制していたのである。

> むしろ彼は、金髪の少年をあまりにも愛しすぎていた。そしてそれは彼にとって危険であった。なぜなら、愛することは彼にとって自然な状態ではなく、むしろ奇蹟であったからだ。彼は恋に落ちてはならず、あのきれいな眼を心地よく眺めることに、あの花の咲くような明るい金髪の近くにいることに満足してはならなかった。彼はこの愛が、ただの一瞬たりとも、官能的なもののそばにとどまることを許容してはならなかった。(36)

では彼がゴルトムントに愛を与えずして、何を与えていたのかといえば、それは「学び」である。この「学び」とはつまり、1.1. で確認したような、教師として教える学問でもあれば、自己実現を志す先達として、ゴルトムントに自身の天分を気づかせるための導きでもある。そしてその二つにおいては、やはり後者の導きの方が重要である。それは、ゴルトムントが自身とナルチスとの違いを知った直後に、この放浪前の二人の友情が終わったことからも理解できる。いずれにしろ、ナルチスはゴルトムントには決して、彼がゴルトムントから受けていたような無心で献身的で官能的な愛は与えず、むしろ自制して、複数の意味での「学び」を与えていたのだ。

さてここまでを踏まえると、放浪前、ゴルトムントとナルチスとの間では、与えるものと受け取るものが異なっていることがわかる。ゴルトムントがナルチスを愛し、身を捧げるのにも関わらず、ナルチスからその愛はかえってこず、別のものが与えられる。このような一種のちぐはぐさこそが、この友情の「奇妙」さに寄与しているのではないだろうか。つまり両者にとって、友情の意味やそれに対する理解度も異なれば、互いが与えるものも異なる、という関係性であることこそ、この友情の「奇妙」さの正体だ、ということである。ここまで、放浪前の二人の関係性を「受け取ることと与え

ること」という構図に当てはめて整理することを通して、友情の「奇妙」さを際立たせることができた。ここからは、放浪後の二人についても同様に分析し、二人がどのような関係性に辿り着くのか、見ていくこととする。

2.3. 放浪後のナルチスとゴルトムント

長尾[30]や渡辺信生[31]は、放浪後のナルチスとゴルトムントの関係性が対等であることは、伯爵の城からマリアブロンへの帰路における二人の対話から読み取れる、と述べている。しかしこの主張には少し疑問が残る。確かに、1.1. に引用したように、ゴルトムントは帰路での対話を経て、ナルチスが自分を対等だと認めてくれた、と感じている。だが、対話の内容そのものを見てみると、やはりナルチスの方が少し優位に立って会話を進めているように思われる。ゴルトムントも自らの意見をはっきりと持つようになり、それをナルチスにぶつけてはいるものの、ナルチスはゴルトムントの考えていることを常に理解しているようで、だからこそ彼の発言に対してゴルトムントは「〈確かに、その通りだ〉」(277)、「〈ああ、そうだ〉」(277)、「〈君の言うとおりだ〉」(278) などという肯定の返事を繰り返している。更に、ナルチスはゴルトムントの考えることが哲学の概念における「イデア」とも結びつくと教えるなど、ゴルトムントの考えを更に深めることにさえ寄与している。実際ナルチス自身、対話においてはゴルトムントよりも自らが優れていることを自覚している。「対話の中で、友の激情と、自分の規律の思想の秩序とを対置させることで、友より優れているように思うことは容易だった。」(309) と。そのため、対話では、少なくとも対話だけでは、二人の関係性は対等であると判断することは難しい。むしろ対等でなく、上下関係は覆らぬままであると捉える方が妥当であるように思われる。しかし、興味深いのはこの引用に続く文章である。

> 対話の中で、友の激情と、自分の規律の思想の秩序とを対置させるこ

とで、友より優れているように思うことは容易だった。しかし、ゴルトムントの像のあらゆる小さな手振り、あらゆる目、あらゆる口、あらゆる巻きひげや衣服のしわは、思索家が成し遂げる一切よりも多く、また、より本物で、生き生きとしていて、かけがえのないものではなかったか。（309）

ここで述べられているのはつまり、ゴルトムントは対話における言葉よりも、芸術作品によってこそ、より多くのものを語っている、ということである。マリアブロンへの帰路で、ナルチスがゴルトムントを対等と認めたのも、あくまで「創作者」（der Schöpfer）（280）としてであった。対話のみにおいては、ナルチスの方が優れていて当然なのである。ナルチスがゴルトムントに語るように、思索家であるナルチスと、芸術家であるゴルトムントとでは、表現に用いる道具が異なるのである。

「よく聞いて、思索家は世界の本質を、論理学を通して認識し、表現しようとする。彼は知っている。僕たちの思考力と、その道具である論理学が、不完全な手段であるということを。それは、賢い芸術家が、彼の筆と彫刻刀は決して、天使や聖者の輝かしい本質を完全には表現し得ないということをよく知っているのと同じだ。にも関わらず、思索家も芸術家もどちらも、彼らのやり方で、それを試みている。」（287）

実際、ナルチスはゴルトムントの作った、四人の福音書の著者の像のうちの一つを見た際、その像の中に、その見た目以上の、様々なものを見出している。

「だが、僕に一つ言わせてくれ。最初に見た時から、この福音史家の像に僕たちの修道院長ダニエルをみとめた。彼だけでなく、彼が当時の僕

> たちにとって意味していた全て、すなわち品位や、善良さや、純朴さをも。（中略）君は僕に、これを見せることで豊かな贈物をしてくれた、我が友よ、君は僕に僕たちの修道院長ダニエルを再生してくれただけでなく、初めて、わたしに君自身を全て打ち明けてくれたのだ。僕は今、君が誰であるのかを知った。」（298）

このように、それぞれの試みは、対話や芸術作品といったそれぞれの手段を通して、相手へと伝わっていく。これは、「受け取ることと与えること」の観点から見れば、一方からもう一方へ、「与えている」ということができるのではないだろうか。つまり、先述のような対話はゴルトムントにとって、ナルチスから与えられる「学び」である。ゴルトムントはこの対話を通して、芸術について考えを深め、思索について学び、何より自己実現について知る（287f）のである。その一方で、ゴルトムントが芸術作品を通してナルチスに与えているものも、また「学び」である。

> 何年も昔、彼が衝撃を与え、警告しながら、ゴルトムントの青年時代に介入し、彼の生活を新しい場所に置いたのと同様に、その帰還以来、友人は彼を悩まし、衝撃を与え、疑念と内省とを余儀なくさせた。ゴルトムントは彼と対等になった。ナルチスが彼に与えたものは全て、何倍にもなってかえってきたのだ。（309）

この「疑念と内省」こそ、ゴルトムントがその作品を通してナルチスに与えた、「学び」という「豊かな贈物」である。放浪前には、はナルチスが与えるのみであった「学び」は、この関係性において、互いから互いへ、双方向に与えられるものとなったといえる。ナルチスが言う通り、与えたものが「かえってきた」のである。

では逆に、放浪前においてはゴルトムントからナルチスに与えられるのみ

であったもの、すなわち愛については、この関係性においてどうなっているのだろうか。先に結論を言ってしまうなら、愛についても同様に双方向的になった、と主張したい。それは、物語の最後の章、第二十章において、再度の放浪から重篤な状態で帰ってきたゴルトムントに、ナルチスがキスをする場面を見れば理解できる。

> ナルチスは、悲しみと愛とで胸を焦がしながら、ゆっくりと彼の方へ、体を下にかがめた。そして今、彼は長い彼らの友情の中で、一度もしたことのなかったことをした。彼はゴルトムントの髪と額に、くちびるで触れた。最初はいぶかしげに、それから感動して、ゴルトムントは何がなされたのかに気づいた。（中略）「今日、僕にこれを言わせてくれ。どれだけ僕が君を愛しているか、君が僕にとっていつもどれほどの存在だったか、君が僕の生をどれだけ豊かにしてくれたのか。」（316）

まさに、これまで決してその想いを言動に表さず、自制してきたナルチスが、「疑念と内省」のすえ、ゴルトムントに愛を与える場面である。ナルチスのこの愛は、ゴルトムントが再び放浪する間に募らせた想いがあふれた、胸を焦がすような情熱的な愛であり、またキスを伴うような官能的な愛である。かつてゴルトムントがナルチスに与えていた愛そのものだといっていいだろう。またこの時、ゴルトムントは若さを失い、アグネスにも見限られ、かつての女性との愛から見放されてしまっていた。そんな彼に、青年時代からナルチスに与えていた愛が「かえってきた」のだ。ナルチスのもとに、ゴルトムントから「学び」が「かえってきた」ように。だからこそゴルトムントはそれを受け入れ、彼もまたナルチスへの愛を口にする。

> 「今僕は気づいた。本当にそうであるということ、つまり、君が僕を愛しているということを。僕もずっと君のことを愛していた、ナルチス、

> 僕の人生の半分は君を得ようと努めることだった。僕は、君も僕を好いていたことを知っていた。だが、君が、プライドの高い君が、いつかそれを僕に言うだろうとは、全く期待していなかった。今、君はそれを僕に言った。今この瞬間、僕が他に何ももう持たず、遍歴や、自由や、世俗や、女性たちが、僕を見捨てたこの瞬間。僕はそれを受け入れ、君に感謝する。」（317）

このように、愛においても二人は互いに与え合う関係性になっている。つまりは、ナルチス一人に注目すると、彼は精神だけでなく愛を知り、愛を与えられる存在になった、ということである。これを踏まえて考えると、物語の結末におけるゴルトムントの言葉、「〈母がいなければ、愛することはできない。母がいなければ、死ぬことはできない。〉」（322）という科白は、橋本が言うような、精神のみの人間ナルチスに対する、精神と感性の二極を乗り越えたゴルトムントからの警告と捉えるべきではないように思われる。むしろ、その言葉は、ナルチスの「胸の中で火のように燃えた」（322）とあるから、彼にはゴルトムントのこの言葉がしっかりと届いていて、むしろこの場面はナルチスが精神のみならず愛を知ったということを象徴する場面として捉えられるのではないだろうか。ナルチスもまた、成長しているのだ。

ここまでの議論をまとめれば、ナルチスとゴルトムントは放浪後、愛と学びの双方を、相互に「受け取ることと与えること」のできる関係性を築いたということができる。このような関係性は、いったいどのような意義を持つのだろうか。

2.4.「受け取ることと与えること」の意義

「受け取ることと与えること」という表象の意義について、1.1. で掲げていた二つの問いに答えていくことによって、議論することとする。まず一つ目に扱うのは、「二人の関係性を通して、二極は統合したのか」という問い

である。結論からいえば、本稿では、二極は決して統合することはないと主張したい。これは、実際作中でもゴルトムントの気づきとして描写されていることである。

> 全ての存在は、二元に、対立に、基づいているように思われた。誰もが女性か男性か、流浪の民か偏狭な市民か、理知的か感情的か、そのどちらかであった――息を吸うことと吐くこと、男性であることと女性であること、自由と秩序、衝動と精神、それらはどんなところでも、同時に経験されえなかった。常に一方の対価としてもう一方を失わねばならず、常に一方は、もう一方と同様に重要で望ましかった！（255）

『ナルチスとゴルトムント』において、二極は統合しない。しかしだからこそ、クラフォードらが言うように、お互いの欠けた部分を補い合うことによって、二極の和解を目指すのである。そしてそのような二極が互いに補う合うことのできる、理想的な構図こそ、「受け取ることと与えること」の並存ではないだろうか。

思えば、女性たちとゴルトムントの関係性も、また「男性であることと女性であること」という二極の境界に成り立っていた。放浪の時代、ゴルトムントは彼女たちと関わるなかで、二極の境界における「受け取ることと与えること」の並列を実践しようとしていたのだ。だからこそ、彼はリディアからもキスに向かってくることを求めたし、女性たちから多くの「学び」を受け取ろうとした。しかし、女性と彼との間に築かれたのは、「受け取ることと与えること」においては「偏り」のある関係であった。これは、ゴルトムントが男女の二極の和解には失敗したことを表しているのではないだろうか。それを踏まえると、ゴルトムントが放浪後に、ナルチスに「〈女性たちが、僕を見捨てた〉」と語るのも、同様にこの失敗を示唆しているように思われる。その点において、女性たちはやはり、ゴルトムントが成長するため

の、つまりは、ただ感性を磨くのみならず、「受け取ることと与えること」の重要性をも学ぶための、一種の足がかりのような役割が与えられていたと考えるのが妥当なのだろう。

ゴルトムントは、その一方で、ナルチスと「受け取ることと与えること」が相互に成り立つ関係性を築くことには成功する。やはりこの作品は「ある友情の物語」なのである。さて、ここで二つ目の問いである。二人は対等になったのだろうか。この「受け取ることと与えること」が並存する関係性において、両者はともに同等のものを与え、受け入れるという、対称的な構図をなす。そこには、かつての上下関係は存在しない。彼らは対等になったといっていいだろう。

むすび

改めて、はじめに掲げた本稿の目的について思いだそう。それはつまり、本作において、二極はどのように乗り越えられ、成長は何を意味するのか。これらを、ナルチスとゴルトムントの関係性を通して読み取ることであった。そしてまさにこの二つの問いへの回答こそ、「受け取ることと与えること」が示している。2.4. で指摘した通り、二極は統合せずとも、互いに受け取り、与えることによって補い合うことができる。これこそが、『ナルチスとゴルトムント』に読み取ることのできる、二極の葛藤を乗り越えるアプローチであるといえよう。また、ゴルトムントもナルチスも、放浪前の友情においては、愛と「学び」のどちらか一方を受け取り、もう一方を与えるだけであった。しかし放浪後は両者ともに双方を受け取り、与えることが可能となっている。このような、「受け取ることと与えること」を同時にできるようになったことこそ、彼らの成長の意味であるといえるだろう。そして重要なのは、この成長の定義が、ゴルトムントだけでなく、ナルチスにおいても成り立つということである。これまでの研究で論じられてこなかったナルチスの成長について、一つの解釈を与えることができたということは、本稿

の一つの意義であるといえよう。

最後に一つ、「受け取ることと与えること」、すなわち „Nehmen und Geben“ という表現の、語順について考察することで、本稿を締めくくることとしたい。英語でも “give and take” というように、ドイツ語においても自然なのは „Geben und Nehmen“ という語順だろう。それが、なぜか本作では反転している。これについては、„Nazriß und Goldmund“ というタイトルと、イニシャルが同じであることを指摘しておきたい。そしてこのタイトル、二人の名前に関しては、ラッセル・ニュースワンガー（Russell Neuswanger）の研究[32]が興味深い。彼は、ナルチスとゴルトムント、それぞれの名が象徴するものが、その本人よりもむしろ相手の特徴に対応している、という鏡写しの関係性を主張する。ゴルトムント（Goldmund）、すなわち「金の口」を指すこの名は、ギリシアの聖人クリュソストモスと意味を同じくし、実際この一致は作中でも言及される（66）。この聖人は、その語る言葉の雄弁さからクリュソストモスと呼ばれるようになった人物で、禁欲主義者であり、地域の人々を導いてきた指導者としての側面も持つ。そしてこれらの特徴は、まさにナルチスのそれと対応している。[33] また、逆にナルチスという名が明らかに象徴しているギリシア神話の少年ナルキッソスは、その美しさから女性にとって抗いがたく魅惑的な人物であり、また、水面を眺める癖があった。そしてゴルトムントもまた、女性にとって非常に誘惑的で、水面を眺める描写は何度も象徴的に登場する。[34] このように、二人の名は本来それぞれの性質を象徴するはずの名が、反転してもう一方に与えられているのである。[35] このような反転する構造を „Nehmen und Geben “ に当てはめて考えてみると、スヴァンベリを参照するなら、確かに放浪前のゴルトムントは他者からの影響を受けやすい受動的な人物であるから „Nehmen” に対応し、逆に導き手であり他者に影響を与えるナルチスは „Geben“ に対応する人物であるといえる。（本稿でも、少なくとも自己実現の「学び」という観点においては、スヴァンベリと同様に、放浪前のゴルト

ムントは受け取る側、ナルチスは与える側と捉えていた。）ここでは、それぞれが担っている行為は、それぞれのイニシャルとは対応せず、反転しているということになる。しかし終盤、「受け取ることと与えること」を相互に行うために、彼らはお互いにこれまでの相手の行為を「かえす」わけであるから、「学び」を „Nehmen“ していたゴルトムントは „Geben“ し、„Geben“ していたナルチスは „Nehmen“ するようになる。つまり、二人が「受け取ることと与えること」を併存させられるようになったとき、„Nehmen und Geben“ の再度の反転が起こり、„Geben und Nehmen“ という、本来あるべき語順に「かえってくる」のである。„Narziß und Goldmund“ というタイトルも、むしろこの表象の仕掛けに合わせるためにこの語順になっていたのではないだろうか。もちろん、彼らはこれら二つの行為を同時に行っているわけであるから、変わらず „Nehmen und Geben“ でもあり続けるわけだが、このような仕掛けがこの表現に組み込まれているという解釈が可能であるということは、それだけで「受け取ることと与えること」という表象が、ヘッセの思想に深く関わるものであるということの一つの根拠となりうるだろう。

注

1） Hermann Hesse: Narziß und Goldmund. In: Gesammelte Schriften. Frankfurt a. M.（Suhrkamp）1987, Bd. 5, S. 7-322. 参照。以下、同書からの引用は、本文中に頁数のみを示す。

2） Vgl. Jürgen Below: Hermann Hesse-Handbuch : Quellentexte zu Leben, Werk und Wirkung. Lausanne（Peter Lang）2023, S. 140.

3） 山口 勝：『ナルチスとゴルトムント』における中世［『人文論究』第 36 巻 , 第 3 号 , 1986, 73-87 頁］、83 頁参照。

4） Vgl. Jakob Svanberg: Die Funktionalisierung von Nebenfiguren in Hermann Hesses Narziss und Goldmund am Beispiel der Hauptfigur Goldmund. o.O.（Högskolan Dalarna）2017, S. 6. URL: https://du.diva-portal.org/smash/get/diva2:1114903/FULLTEXT01.pdf（最終閲覧日：2025/11/27）

5） Ebd.

6） ヘルマン・ヘッセ（高橋 健二訳）:知と愛（新潮文庫）1959 年
7） 長尾 伸：ヘルマン・ヘッセの『ナルチスとゴルトムント』について［『東京経済大学人文自然科学論集 / 東京経済大学人文自然科学研究会 編』第 3 号 , 1963, 39-68 頁］、63 頁参照。
8） Svanberg, a.a.O., S. 16.
9） 長尾、前掲書、63 頁参照。
10）Vgl. Svanberg, a.a.O., S. 15.
11）Ebd. S. 26.
12）Vgl. Helen Christine Crafford: Die Funktion Der Polaritätsfiguren In Demian, Der Steppenwolf Und Narziss Und Goldmund Von Hermann Hesse. o.O.（University of Pretoria）2013, S. 90. URL: https://repository.up.ac.za/server/api/core/bitstreams/ca5e58ab-8d65-494a-a73f-187e6a3912aa/content（最終閲覧日：2025/11/27）
13）Vgl. Richard Blasius Matzig: Hermann Hesse in Montagnola. Studien zu Werk und Innenwelt des Dichters. Basel（Amerbach）1947, S. 88.
14）Ebd.
15）山口、前掲書、83 頁参照。
16）橋本 裕明：ゴルトムントとヨゼフ・クネヒトの〈神秘的〉キリスト教［『名古屋芸術大学研究紀要』第 33 巻 , 2012, 265-283 頁］、273 頁参照。
17）Vgl. Matzig, a.a.O., S. 88.
18）Vgl. Crafford, a.a.O., 98.
19）高橋 陽一：ヘルマン・ヘッセ「ナルチスとゴルトムント」Ⅰ［『帯広畜産大学学術研究報告 . 第Ⅱ部 , 人文社会科学論集』第 6 巻 , 第 1 号 , 1982, 103-122 頁］、103 頁参照。
20）松田 幸子：内面への道の探求者・ヘッセ：『ナルチスとゴルトムント』をめぐって［『上田女子短期大学紀要』第 25 号 , 2001, 1-9 頁］、4 頁参照。
21）同書、4 頁参照。
22）Vgl. Svanberg, a.a.O., S. 11.
23）Ebd. S. 12.
24）Vgl. Crafford, a.a.O., 91.
25）もちろん、ナルチスの「発展」に言及している研究も存在しないわけではない。エドムント・グネフコウ（Edmund Gnefkow）はナルチスが、「ゴルトムントと並行して」（Edmund Gnefkow: Rückblick, ein Fragment aus der Zeit um 1937. Biographie, 1952. Freiburg i. Br.（G. Kirchhoff）1952, S. 99.）発展する点を指摘

している。しかしこの論文でも、この議論と二人の相補性とは、直接結びついてはいない。

26）更に物語の後半では、「母」は精神と感性の対立すら超える存在へと変容していく（176f）。しかし本稿の議論には、このような「母」の変化は直接関係しないため、便宜上、あくまで感性を司る存在として「母」を理解しておくこととする。

27）高橋 陽一、前掲書、117 頁参照。

28）山口、前掲書、81 頁参照。

29）本作の「愛」という概念は、「母」と同様に複雑である。例えばナルチスの禁欲的な接し方も、作中では「愛」と表現される（86）。だがこれについても、本稿では特に感性の側に属するものを「愛」として扱いたい。

30）長尾、前掲書、63 頁参照。

31）渡辺 信生：ヘッセの『ナルチスとゴルトムント』について［『山口大学文学会志 / 山口大学文学会 編』第 27 号 , 1976, 23-37 頁］、28 頁参照。

32）Vgl. Russell Neuswanger: Names as Glass Beads in Hesse's "Narziß und Goldmund". In: Monatshefte. o.O.（University of Wisconsin Press）1975, Vol. 67, No. 1, p. 48-58.

33）Ibid. p. 48f.

34）Ibid. p. 49.

35）このようにニュースワンガーは、『ナルチスとゴルトムント』における鏡像構造を論じている。そしてその中で彼が、「愛における、与えることと受け取るにおける、鏡像構造」（the mirroring in affection, in giving and taking）（Ibid. p. 54.）に言及していることには、触れておかなければならないだろう。そこで彼は、二人が関わる際に最初の行動を起こすのは、主に禁欲的なはずのナルチスだと主張する。ニュースワンガーはここから、愛においてナルチスが与える側であり、ゴルトムントが受け取る側であるという構図を読み取る。しかし、彼は本稿のように „Nehmen und Geben“ という表現そのものに言及しているわけではない。また彼は、それぞれが「与える」ものの違いや、放浪前後における関係性の変化、などという要素を見落としているようにも思われる。更にいえば、本稿で見てきた通り、与えたものは相手から「かえってくる」ものであるから、必ずしも最初の動きの方が大事というわけでもないだろう。ところで、この「受け取ることと与えること」という表象は、ニュースワンガーに限らず、管見の限りではこれまでどの研究でも扱われていない。しかしこの表象は、それこそ「かえってくる」表象などにかたちを変えて、ヘッセの他の作品にも見出すことができるように思

われる。もしこのテーマを他作品でも分析することで、その変遷をたどることができたとしたら、それはヘッセの思想の、これまで見出されなかった新たな側面を照らし出すことに、大きく寄与するのではないだろうか。差し当たり、この「かえってくる」表象をはっきりと見出すことができるように思われる『デーミアン』と、『ナルチスとゴルトムント』とを比較することを、今後の研究の課題としたい。